

山中恒さんの作品から

『あばれはっちゃく』

桜間長太郎はズルイ大人をみると闘志がムラムラわいてくる正義感あふれるガキ大将だ。世のため・人のため・クラス一番の美少女ヒトミちゃんのために、今日も騒動が……。79年から85年までTV放映された人気シリーズの原作。●理論社刊



『八月の金貨』

1945年8月14日、敗戦の前日にタイムスリップしてしまった小学校5年生の研治と信子は、少年時代の信子の父親に出会う……。集団疎開の様子や軍国主義の教師たちに驚きながら、「いじめ」や「戦争」について考えはじめる。人気漫画家・松本大洋の挿絵。●あかね書房刊

『ぼくがぼくであること』

やかましい母親や優等生ぞろいの兄妹のなかで、秀一だけはダメな子だった。ひよんなことから家出をした秀一は、次々とふしぎな事件にまきこまれ、見せかけだけの家庭や社会の真の姿を感じとるようになっていく。少年の力強い成長を描く名作。●岩波少年文庫版



子どもが本と出会うとき

【インタビュー】

読書感想文なんてやめてほしいな

山中恒

児童読みの作家

『あばれはっちゃく』『おれがあいつであいつがおれで』『ぼくがぼくであること』『くたばれかあちゃん』——「よい子」ではなく、大人に反抗しながら自分の頭で感じ、考え始める子どもたちを描き続けてきた児童読みの作家・山中恒さん。40年にわたる創作活動をささえた、「子ども」たちへの思いを語っていただいた。

——山中さんは「児童読みの作家」とご自身をお呼びになつていただけますね。

児童文学者って「学」がつくと、本を読むとき「学」ばなきゃならないみたいでしょ。僕の本は読みものだから、へらへら笑って気に入らなきゃ途中で投げてもいいって思うんだよね。だからあえて自分で「児童読みの作家」って名乗ったんです。

僕の子どもの頃、広っぱには一種の子どものコミュニケーションがあった。そこに肺病やみのお兄さんがぼうつと座っていて、子どもに悪いことも良いこともいろいろ教えるんだよね。そばに寄っちゃいけないと親は言うけど、お兄さんの話はおもしろくて、いろんなことを聞きにいったなあ。

もう一つ。お祭りに行くとき、おじさんがいてね。ヨダシをつけたりしながら、おじさんが引張って、あつというまに鶏を作ったり、丁髷の侍を作っちゃったりする。もう見事に早いわけ。それを子どもたちが見て、わーっと感動する。その人たちの作品は、博物館にも飾られなければ美術展にも決して出ない。だけどそのとき、子どもに感動を与えているんだよ。

僕は児童読みのもの送り手として、その亭主に慰められてまた机に向かった」なんて言っていたけど、何を言っているんだ、ドラえもんは面白いじゃないか。

——読書感想文の宿題で本が嫌になる子どもは多いのでは？

読書感想文なんて、本を読んだ罰として書かせられるようなものじゃない？ つらいよね、あれ。夏休みが終わる頃、みんな四苦八苦なんだよ。あんなバカなことはやめてもらいたいと思う。僕たちが読んでつまらないものを、子どもが読んでつまらないものがある。だから僕は、全国学校図書館協議会の読書コンクールでも、つまらない本はつまらないという感想文を出さなきゃいけないって言う。そうやって、だめなものはないかと読んでやらないよって淘汰していかなくちゃ……なんて言うから嫌われるんだな、僕は。

今度の文部科学省の学習指導要領の中に「読書」が入っている。ますます本嫌いの子どもができる。なぜって、学校では本を嫌いだって言えないんだよ。何冊読んだか、どの本で感想文を書いたかを教師の裁定で評点化することになったわけだから。

いま、「朝読」といって毎朝学校で読書する運動がある。まあ悪くないとは思うんだよ。ただし僕は、漫画とか、絵ばかり載っている図鑑みたいなものでもいいと思うのね。そこにもやっぱり文字があるし、多少でも文字に慣れてほしいから。もちろん、たまには厚い本も読んで

んな広っぱのお兄さんや鉛筆工のおじさんみたいになりたいと思つています。後の時代まで残らなくていい。今読んでいる子どもが、畳を叩いてひっくり返って笑ってくれば、それで幸せだし、怖がって夜便所に行けなくなれば、それはそれでいい。子どもの感性をゆるがすものを書かなかつたらしようがないじゃないの。僕は少なくとも、僕の本を広げたく、この僕と遊んでもらいたい。ストーリーを通じて、一緒に楽しみたいんです。

僕は子どもの本を書いている以上は、子どもについての専門家になるべきだと思う。そう言うとき「子どもにおもねてい」という人がいる。けどどあいつらは……と言っちゃいけない……お子さまたちは感覚が非常に鋭敏だから、彼らに「おもねる」のは容易なことではないよ。モーニング娘。の顔を覚えるとか、L'Arc〜en〜Cielの限定版CD聞いてみるとか日々努力しなきゃ。だって、子どもたちが夢中になっているものは何だろう、それに興味をもたないといけないよ。

あの名作「ドラえもん」を児童文学者協会のある女流作家が、「子どもたちがドラえもんを見て大喜び、視聴率が高い。なんと情けない世の中か。もう子どもの本を書くのを止めようかと思つたけれど

もらいたい。けどどひどい学校では、そのために朝早く学校に行かなきゃならない。それはないだろうと思うね。ゆとりだ何だつて言いながら、ますます子どもにとっては辛くなるんだよ。

昔は子どもだったはずの大人たちにむけて

——昨年は『すっきりわかる「靖国神社」問題』『あたらしい戦争ってなんだらう？』という、大人も対象にした本を出版されました。

かつての児童読みのものを読んでくれた人たちは、今50歳代に近いんだけど、実はこの人たちが、世の中で一番だめなんだよね。この世代は第一線のジャーナリストだったりするけど、小泉が初詣に行った靖国神社がそもそも何なのか、わかっていない。イラク戦争は、石油支配のための戦争だけど、ジャーナリスト自身が不勉強で知らない。それを見るとイライラして、靖国神社問題でもイラクの問題でも大人の読者にメッセージを発しなくちゃと思つた。

よく考えてみると、僕たちが育てた子どもが大人になって、その大人がバカで、だから子どももバカになるという方程式が出てきちゃうと、ちょっと責任を感じるよ。ただ、僕が一番気になるのは、『少年H』というベストセラーのように、戦争体験をトクトクと語りながら嘘八百を書く方がいるってこと。あの本を読んで戦争がわかつたなんて、こともあるように朝